続 徒然つれづれ

いつも転換期

桑野　巍

今春も甲子園球場へ行った。センバツ高校野球を内野特別自由席で二日連続観戦した。同道は家族３人（親・子・孫）だ。選手たちのきびきびしたプレーぶりは小気味よい。泥まみれのユニフォームも礼儀の正しさも魅力があるが、カーンというボールを打つ生音や左右のアルプス席の応援風景もステレオ風で音が腹に響く。球場全体を肉眼で見渡すことで何だか伝統的な美意識さえ感じた。

中学生の孫に40数年前にネット裏の記者席に詰め、取材送稿していたことを得意がって話したが、孫は「あっそう」と簡単な相づちだけで寂しかった。選手や指導者たちにインタビューし、ふるさと意識あふれるアルプス席の人間模様を雑観風にまとめたことも話したが反応は極めて薄かった。

甲子園風景を自慢げに野球好きの先輩に話したら、ある時口の悪い彼は「甲子園の裏側は人身売買の場ではないのか」と突っ込んできたことも思い出した。その時の私の答は「甲子園にも光と影がありますよ」で、その場を乗り切った記憶も脳裏を去来した。高校野球は“純粋性”でいまも人気が続き、多くのファンをひきつけているというのに。

一方プロ野球になると、今年の人気は右肩下がりだ。各球団が好選手を獲得するため、選手や関係者に金銭供与したという影の部分が発覚したからだろうか。スポーツマンシップはどこへ行ったのだろうかと思わせる醜いアンフェアな事件がファンを失望させたからなのだろうか、残念である。

もう一つはプロ野球選手の米国行きだ。有能な選手は一度は本場米国でプレーしてみたい、力を試したいとして渡米していく。松坂大輔君らの挑戦は今年大きく花開いたとみてよい。今年米大リーグに新登録した日本選手は13人だそうだが、そのほかにマイナー扱いが数人いるというから、ファンの関心は海の向こうに広がった。国内空洞化といえるかどうか、ファンがワールドワイド化していることは確かだ。これは野球界の一大転換期を思わせる現象とみた。

この現象に音をあげているのがメディア業界で「野球に限らず、広い米国大陸をどうやってカバーすべきか」に困惑している。新聞・通信、テレビ業界では「運動部の陣容には限りがある。国内取材に穴を開けるわけにもいかないし、取材経費の問題も大きい」と弱音を吐いているのが実情だ。

また、別の面でスポーツ専門紙が苦悩を抱えている。1996年のスポーツ専門日刊紙の一日の発行部数は全国で658万部だったが、2006年は525万部に落ちた。約133万部の減で、率にして約20％のダウンという。新聞の発行部数減少は“お家の一大事”なのだ。原因はいろいろあろうが、一番はインターネットでのスポーツ情報の氾濫らしい。そこへ国内のプロ野球離れや中央競馬を中心とする公営ギャンブルの売り上げ減少が絡んでいる可能性もあり、スポーツ新聞の苦悩は当分続くだろうという見方が強いという。

スポーツ界の転換期とは全く異質だが、地方行政の世界も転換期を迎えている。夕張市現象を引き合いに出すことは遠慮するが、財政困窮だけでなく、人口減少が進み、分権時代が幕開けしているからだ。それなのに地方自治についての住民の関心が年を追うごとに希薄になっていることが大きい。住民自身が自治から遠のいて“自殺行為”を犯していないか、気懸かりだ。今回の地方統一選挙の投票率も上がってこないどころか、低下する傾向だ。自治を育てる意思がないのか、自分だけが平和で将来に不安もなく、豊かさを欲しているのか、果たすべき責任を果たしていないのではないかと思えてならない。

自治の当事者は住民一人ひとりの意識と行動なのに個人個人は自分勝手を優先しているところが見える。当事者はまだいる。先の選挙で新しく選ばれた首長、議員だけでなく、現職の特別職や職員も完全当事者で、この人たちは自治の質向上に邁進してほしい。住民と共感できる自治体づくりを目指してほしい。いまも自治の転換期というならばそれに対応できる行財政、組織改革に取り組み、模範的な運営の新機軸の風を起こしてもらいたい。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）